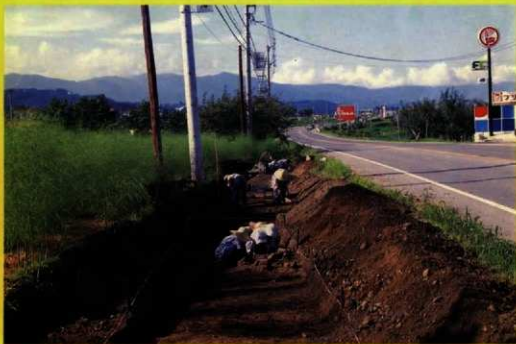


飯山市埋蔵文化財調査報告 第13集

長野県飯山市

田草川尻遺跡Ⅳ

—— 国道117号線県単道路改良工事に伴う調査報告書 ——



1986・2

飯山市教育委員会

飯山市埋蔵文化財調査報告 第13集

長野県飯山市

田草川尻遺跡Ⅳ

—— 国道117号線県単道路改良工事に伴う調査報告書 ——

1986・2

飯山市教育委員会

序

飯山市教育委員会
教育長 浦野 昌夫

田草川尻遺跡は、縄文時代から平安時代までの各期にわたる大複合遺跡であり、当地方では重要な遺跡の一つであります。昭和47年に静岡バイパスの敷設の際に緊急発掘調査を実施したのを皮切りに、53年工事用地造成に伴う第2次調査、57年にガソリンスタンド建設に伴う第3次調査を実施してまいりました。

このたび県単道路改良工事が着工されるにあたり、飯山建設事務所長より調査委託を受けましたので飯山市教育委員会では文化財保護の立場からこれを受託することにし、飯山南高等学校の高橋桂教諭を団長をお願いして調査団を結成いたしました。

発掘作業は7月2日から開始され途中雨にたたられる日もありましたが、団長をはじめ調査員及び作業員の方々の献身的な努力によって7月17日に終了することができました。

調査の結果は、縄文・弥生・古墳・平安各時代の遺物等数多く出土し、田草川尻遺跡の重要性が更に解明されました。この報告書が埋蔵文化財に対する理解を一層深める上に役立ち、多くの方々に利用されることを願ってやみません。

末筆となりましたが、この調査にあたって御協力いただきました飯山建設事務所をはじめ、地元関係者の皆様に深く感謝申し上げて序といたします。

昭和61年 2月22日

例 言

1. 本書は、国道117号線県単道路改良工事（チェーン脱着場建設）に伴う、飯山市田草川尻遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、飯山建設事務所から依頼を受けた飯山市教育委員会が調査主体となり、昭和60年7月2日～7月17日にかけて実施した。
3. 調査の整理・作図は高橋桂団長指導の下飯山市教育委員会事務局が実施した。
4. 本書の執筆は以下のとおりである。

小川恵一……第Ⅱ章第1節

望月静雄……第Ⅰ章、第Ⅱ章第2・3節

第Ⅲ章

目 次

序

例言

第1章 遺跡概観	1
第1節 遺跡の位置	1
第2節 周辺遺跡	3
第3節 田草川尻遺跡	6
第II章 調査	9
第1節 調査に至るまでの経過	9
第2節 調査経過	10
第3節 層序	13
第III章 発見された遺構と遺物	14
第1節 遺構	14
第2節 遺物	20
1. 縄文時代前期の土器 2. 弥生時代後期の土器 3. 古墳時代の土器 4. 平安時代の土器 5. 石器	

挿 図 目 次

第1図 田草川尻遺跡の位置 (1:50,000)	1
第2図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)	3
第3図 深沢遺跡出土の土偶	4
第4図 山ノ神遺跡出土魚形線刻土器	5
第5図 勘助山古墳測量図	5
第6図 遺跡地形図	7
第7図 遺構配置図	8
第8図 調査区	11
第9図 層序	13
第10図 H地区 遺構配置図	14
第11図 A-12グリット集石	15

第12図	壑穴遺構・土壌	15
第13図	I地区 全体図	16
第14図	縄文時代前期の土器拓影図(1:3)	20
第15図	弥生～平安時代の土器(1:3)	22
第16図	石器実測図(1:2)	25

写真目次

写真1	遺跡遠景	2
写真2	H地区調査風景	12
写真3	I地区調査風景	12
写真4	I地区8区遺物出土状況	17
写真5	H地区壑穴遺構	17
写真6	H地区遺構	17
写真7	縄文前期土器出土状況	18
写真8	砥石出土状況	18
写真9	I地区4区弥生時代鉢出土状況	19
写真10	I地区1区古墳時代甕出土状況	19
写真11	縄文時代前期の土器	21
写真12	弥生時代後期の鉢	22
写真13	弥生時代後期の鉢	22
写真14	古墳時代の甕	24
写真15	古墳時代の甕	24

第I章 遺跡概観

第1節 遺跡の位置

田草川尻遺跡は、飯山市大字蓮字北原地籍を中心として、縄文～中世に亘る10万㎡に及ぶ一大複合遺跡である。(第1図)

甲信国境に源を発する千曲川は、佐久・上田盆地を流下し、長野市川中島付近で犀川を合わせ肥沃な善光寺平を形成する。善光寺平東縁に至ると東側の長丘陵、西側の斑尾山麓の隆起地帯を穿入蛇行する。そして中野市古牧地区の長丘陵北端に至ると再び流域を広げ信濃に最後の平を残す。これが飯山盆地である。飯山盆地を過ぎると信越国境の山岳地帯を再度穿入蛇行し越後へと流れ去る。

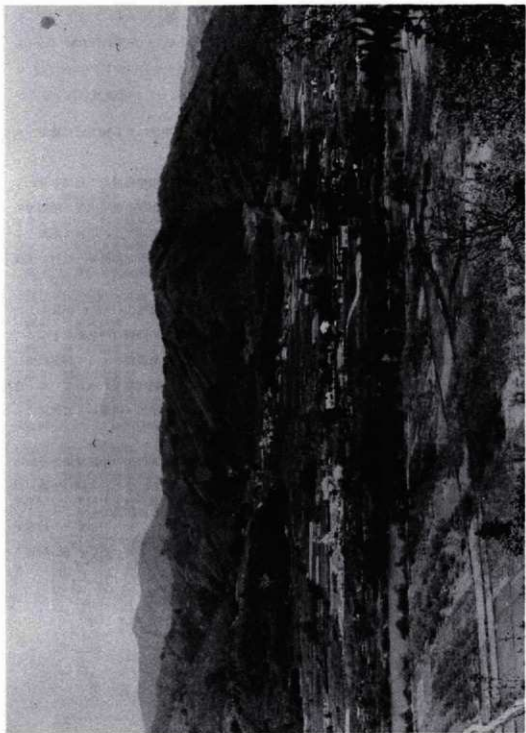
田草川尻遺跡は飯山盆地が展開する最初の地点に位置する。東側に高牡山(1352m)が聳えているために比較的狭長な沖積地を千曲川が流れ、善光寺平と飯山盆地との回廊口的な地点となっている。飯山盆地西縁は上境～鬼坂層層線によって画されているために急傾斜をもって斜面に接している。そのため山地から流出する河川は急流をなし、斜面の急な小扇状地を形成している。遺跡の所在する秋津地区でも三つの扇状地が発達している。すなわち、清川・田草川・宮沢川による各扇状地である。

田草川尻遺跡は、このうち田草川扇状地扇端面に立地する。南側は宮沢川の扇状地と千曲川沖積地に接しており、北側は清川扇状地との間の低湿地帯に接している。また、東側は千曲川が扇状地扇端部を抉るように(攻撃斜面)が流れており、その比高差は5m前後である。



第1図 田草川尻遺跡の位置(1:50,000)

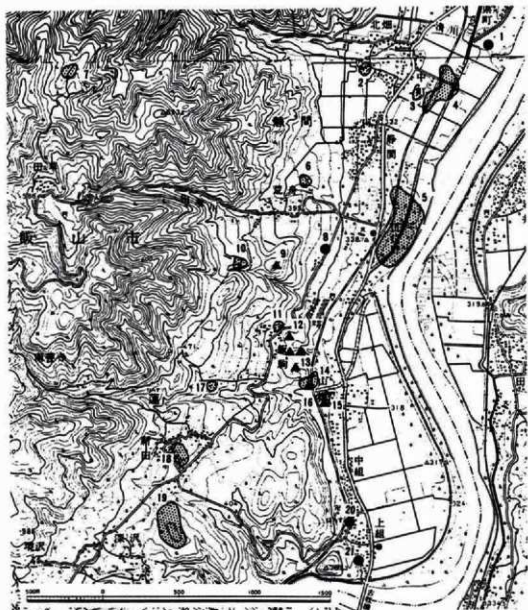
景 理 論 圖 1 圖 1



第2節 周辺遺跡

当田草川尻遺跡の位置する秋津地区には、21ヶ所の遺跡が確認されている（第2図）。時期的には縄文早期から平安・中世に及んでいる。特に著名な遺跡としては、縄文中期深沢遺跡8、同晩期山ノ神遺跡6、勸助山古墳9などが挙げられる。

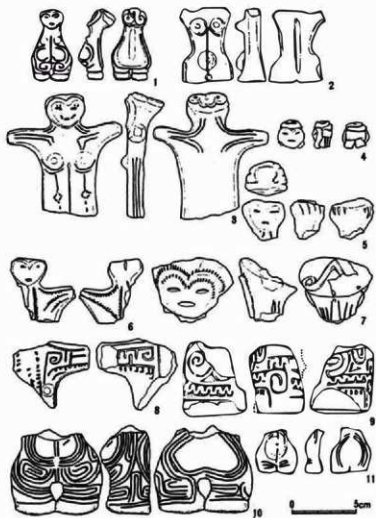
深沢遺跡……昭和37年、当時中学生であった猪瀬良平氏が採集した土偶脚部破片に注目した神



第2図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

田五六・高橋桂氏等によって、昭和38年～40年にかけて3回発掘調査された。土器は縄文中期初頭～中葉に比定されるもので、北陸の新崎様式に極めて類似する土器が存在している。また、特筆すべきは土偶が45点出土したことである。中でも中空大土偶は、新潟県上野遺跡例に類似があり、土器・土偶とも北陸地方の様相が認められている（西沢 198）。

山ノ神遺跡……昭和47年、土地改良工事に際して発見され、急遽発掘調査が実施された。約90㎡の範囲に確認された集石遺構を中心として、晩期に属する多量の土器・石器が検出された。土器は佐野Ⅱ式、佐野Ⅲ式を中心とする土器群であり、佐野式土器を補充する資料として重要視されている。（大原 1982）さらに、線刻による魚形が描かれた土器片の出土は、他に類例がないというだけでなく当時の生活思想の一端を知る好材料である。（高橋 1972）

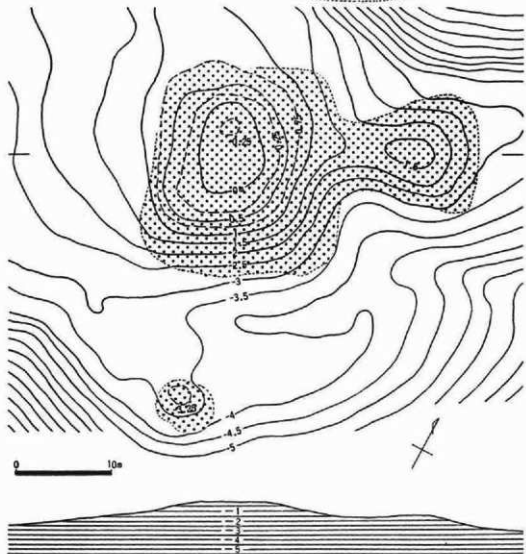
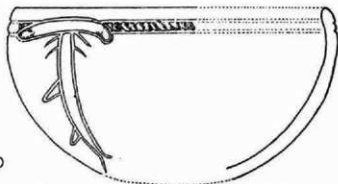


第3図 深沢遺跡の土偶

第4図

山ノ神遺跡出土の
魚形線刻面土器

(1:1.5)



第5図 勸助山古墳測量図(県史刊行会原図に加筆)

勸助山古墳……松沢芳宏氏によって確認されたもので、前方後方墳として推定されている。(松沢 1982)ただし、測量調査のみであり、発掘調査を怠っていないために具体的な内容については一切わかっていない。しかし、本古墳が古式古墳の可能性が高い事は、田草川尻遺跡に直接関係してくるばかりではなく、飯山地方における古墳文化を究明する上で重要な鍵となることは間違いないだろう。

第3節 田草川尻遺跡

長野県史によれば本遺跡は、県史番号飯山市127(縄)前・中期土器、石鏃、打石斧、石器、凹石(弥)堅穴住居、栗林式、箱溝水式(古)堅穴住居、祭祀址、五領式、和泉式、鬼高式、須恵器、滑石製勾玉、鉄鏃、鏡、褌羽口(高坪)(奈)須恵器(平)土師器、須恵器、刀子となっている。また、同県史主要遺跡(北・東信)では第1次・2次の成果報告が担当の高橋によってなされているが、本稿では第1次調査～3次調査についてその概要を簡単に記しておきたい。

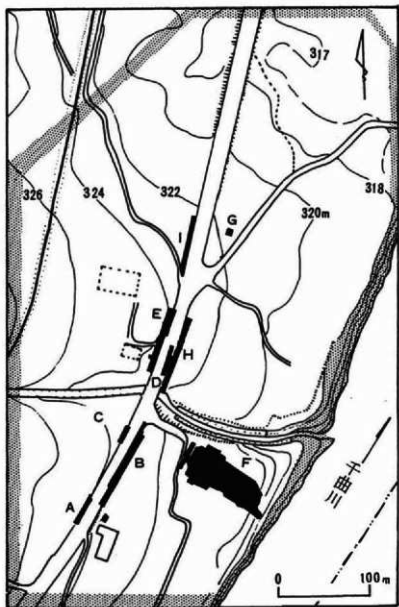
第1次調査……昭和47年、国道117号線静岡バイパス敷設工事に併い緊急発掘調査が実施された。A～E地区、約600㎡の調査によって古墳時代の和泉期末期ないし鬼高期初頭に該当する住居址2軒、平安時代1軒と土埴13基、および古墳時代祭祀遺構2基が検出された。

第2次調査……昭和52年、工場用地造成に伴う調査であったが、現在でもそのまま原野となっている。調査では、弥生期4、古墳時代4、平安時代11の計19軒の住居址が検出された。弥生後期の土器は量的にもまとまっており、太田文雄は土器群を分析して、田草川Ⅰ・Ⅱ式に分類し地城編年を組み立てた(太田・1980)。

第3次調査……昭和57年、飯山市農業協同組合によるガソリンスタンド建設に伴い調査が実施された(G地区)。タンク埋設部分の約100㎡を調査したのみであったが、遺物集中箇所2を検出し、そのうち第1地点は弥生後期の赤色塗彩土器のまとまりであり、祭祀の可能性も考えられている。土器は弥生期末期に位置づけられる。

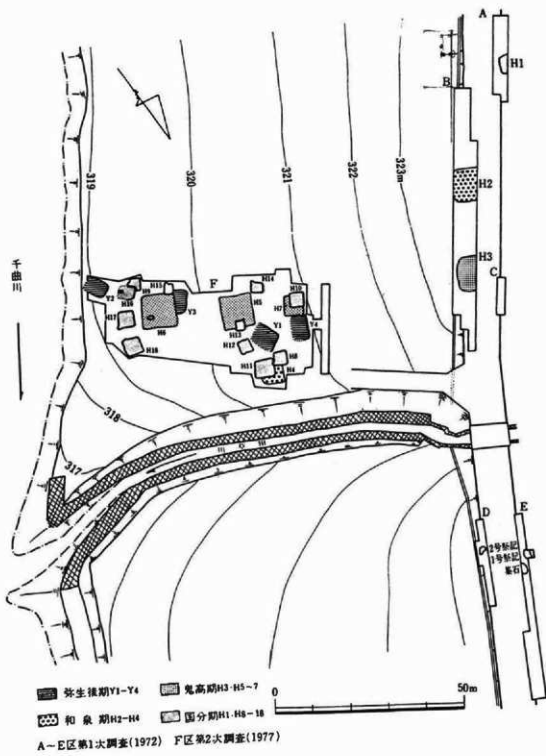
以上の調査結果から、田草川の南北には遺構に差異が認められ、南側は集落、北側は集落外郭地帯であった可能性が考えられる。また、古墳時代鬼高期の大型住居址が一列に配列されると推測される点は、該期の集落形態を知る上で極めて興味深い事例であろう。(第17図)

今回の調査区は田草川の北側に位置し、(第6図H・I地区)、第1次調査のD地区(2号祭祀遺構)にH地区は隣接している。またI地区はE地区の北に近接する。



第6図 遺跡地形図

A～E区 第1次調査(1972) F区 第2次調査
 G区 第3次調査(1983) H・I区 今回調査区



第7图 遺構配置图(1:1000)

第Ⅱ章 調 査

第1節 調査に至るまでの経過

昭和59年12月3日、県教育委員会文化課より、田草川尻遺跡内において県単道路改良工事（チェーン脱岩場）が着工されるにあたり、飯山建設事務所より協議書が提出されたので現地協議したい旨の連絡があった。

12月17日、現地において県文化課小林指導主事、飯山建設事務所中村建設課長、飯山南高等学校高橋教諭、市教育委員会望月技師の4者による現地協議が行なわれた。

その結果、遺跡範囲内であることが確認されたが、工事の変更は困難であることから緊急発掘調査を実施することで合意された。ただし、時期的に今年度の発掘調査は不可能であるので、来年度実施予定とすることとした。また、調査費用は飯山建設事務所で負担し、飯山市教育委員会へ委託したい旨の要望が出された。

12月21日、県文化課より飯山建設事務所から調査依頼された場合は受託するようにとの通知があり、調査対象面積約600㎡のうち150㎡以上を発掘調査することとし、その費用100万円の予算書が示された。

昭和60年4月30日、飯山建設事務所より発掘調査依頼があった。5月9日、市教育委員会は文化財専門委員会と協議した結果調査委託を受けることとした。調査は調査会を編成して行なう事になり、会長に浦野市教育長、副会長に武田教育次長、委員に佐藤政男氏、上原幸夫氏、高橋桂氏、坪井剛氏を決め、調査団長には高橋桂氏、調査員に松沢芳宏氏、松沢伸一氏および望月技師を決めた。

5月10日、文化庁長官あて埋蔵文化財発掘通知を提出した。

5月13日、調査に併う土捨場の件について建設事務所と協議を行なった。

6月21日、飯山建設事務所長池田吉雄氏と発掘調査委託契約を締結した。

6月29日、市役所において調査会及び調査団の結団式を行った。会議において調査計画の細部を協議し、調査日程を6月30日より7月20日までとする事等を決めた。また作業員については地元秋津地区の方を15名程お願いする事とし、作業員責任者を上原幸夫氏にお願いした。

6月30日、調査準備として器材等の運輸を行なった。

7月2日、午前9時に発掘作業員全員が現場に集合し、搬入式を行って発掘作業の安全を祈願

した後第1日目の作業に入った。

第2節 調査経過

チェーン脱着場建設予定地は二箇所あり、国道117号線を介在させて、北側に道路の西に接する幅4m、長さ60m（I地区）、南側に道路の東に接する幅4m、長さ72mの区域（H地区）である。（第8図）

H地区……H地区の北半は胡桃のきょう木が立ち並んでいたため、木根による攪乱が著しいと判断し南側を中心に調査することにした。グリット設定は、工事用杭を利用して2×2mのグリットを設定した。なお、既存道路との間には排水溝があり、そのためBラインは1.5mおよび変則的グリットとなった。

I地区……飯山市農業協同組合秋津事業所給油所の西側である。農地との境界杭より50cm内側に2×3mグリットを設定した。

調査は、6月30日より実施する予定であったが降雨のために中止し、早朝より器材運搬のみ行った。翌日も雨天が続き、ようやく実施できたのは7月2日からであった。天幕設置およびグリット設定を行ったあと、表土よりすべて手作業で実施した。Ⅱ層上面まで約30cmの層厚であったが、各グリットよりピット等若干の遺構および土師・弥生土器片が検出されたのみであった。

なお、Ⅲ層下を掘り進めたところⅢ層下に黒色土の堆積が認められ、同層中より縄文前期土器片が出土した。そのため、A-4・5および10を黒色土まで掘り進めることにした（Ⅲ層は縄文前期以降の二次堆積土であることが判明）。また、7月10日にはI地区に機械を入れ表土を削いだ。1区では黄褐色土層まで約20cmと薄く、3区付近より傾斜を増し、5区では表土より70cmを測る。そのため5区以降では、土師器出土レベルの-50cm面まで精査することにした。ただ4区では土師器出土レベルより高位から弥生土器が出土することから、かなり攪乱していることが窺えた。

したがって、調査はH地区出土遺構の実測作業が中心となった。作業は7月2日より17日まで16日間、途中降雨のため6日間の作業休止があり、実質10日間で全作業を終了することができた。なお、7月24日には秋津地区において反省会を開き、埋蔵文化財に対する認識を再確認し得た点も調査の成果であろう。

第3節 層 序

調査区における層序は第9図のとおりである。

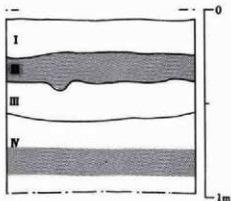
第I層 耕作土

第II層 黒色土。約15cmの層厚である。本層からは平安時代・古墳時代・弥生時代の遺物が出土しており、弥生以降の文化層として扱えられる。

第III層 黄褐色土。二次堆積土層である。砂礫を多量に含む。弥生文化期以前の氾濫による堆積土であり、現地形を形成した土層である。層厚20cmを測る。

第VI層 黒色土。層厚は50cm以上で、上限より約25cm下位付近より縄文前期土器片が出土している。

田草川北側の調査は、第1・3次において実施しており、今回の調査区の層序とは基本的に差異は認められない。第1次調査E地区の記載では、「地層は表土・黒色土・黄褐色土へと推移」とあり、今回のI～III層と同様である。ただIV層の存否については記載されてなく、僅か15mほど隔てているのみであるが、旧地形を考える上で興味を覚える。また、第3次調査G地区では「耕作土(20cm)の下層が黒褐色泥礫土層が厚く堆積」しており、本地区のIII層が欠如している。今次の調査地I地区もG地区と同じ様相を呈している。第III層黄褐色土層が田草川の氾濫によるものとすれば、氾濫原のE・H地区に黄褐色土層が厚く堆積し、より遠いG・I地区に至っては、黒色泥礫土層が示すとおり、黒色土中に砂礫が混る程度であることもうなづける。さらにH地区のIV層が厚く堆積することは、



第9図 層 序

弥生期以前谷状地であった可能性が高い。

第三章 発見された遺構と遺物

第1節 遺構

1. H地区(第10図)

当地区で検出された遺構は、堅穴遺構1、土坑1、柱穴16である。これらの遺構は第Ⅲ層黄褐色土層を掘り込んで構築されている。調査区幅3.5mのため、これらの遺構を有機的に把えることは出来なかったが、少なくとも古墳時代以降に当地区に生活空間の一部があったことは疑いない。

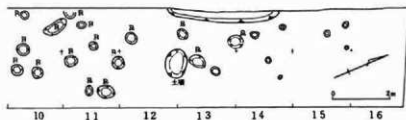
堅穴遺構……B-12・13・14グリットにかけて東側部分のみ検出された。(第12図) 深さは16cmと浅い。本遺構は堅穴住居址の可能性が高いが、一部分のため遺構全体が不明瞭であるので敢えて堅穴遺構としておく。なお、住居址である場合は、田草川の北側一帯において初の住居址である。遺物は土師器細片が数点出土したのみである。

土坑……A-12・13グリットにおいて検出した。(第12図) 東西106cm、南北70cmの楕円形プランを呈する。深さは8cmと浅いが、覆土中より土師器細片が出土している。

柱穴群……A・B-10～16グリットに亘り検出された。特にA・B-10・11グリットにおいて検出されたP₁～P₂は明確に柱穴として把えられる。ただ、これらの柱穴は約20cmの第Ⅲ層黄褐色土層を掘り抜き、第Ⅳ層黒色土層に達しており、さらに覆土において第Ⅳ層との土層の相異が認められなく加えて柱穴底の硬軟が認められなかったために柱穴底は確認できなかった。

なお、各ピット上部より土師器細片が出土している。

集石……A-10グリットにおいて礫の集中する部分が認められた。これらの礫は特定の河原石で構成されるわけではなく、堆積土中の礫の集合であり、河川氾濫による集石もしくは人為的な片づけの両要素が考えられる。図示しなかったがB-7グリットにおいては凹地状となった部分内に多数の礫のまとまりが認められた。また第11図に示した集石は、Ⅲ層上面にまばらに点在して



第10図 H地区 遺構配置図(1:20)

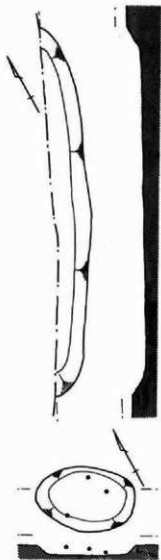
おり、河川の氾濫流路により形成されたものと解される。したがって、本地区で検出された集石は人為的な集石遺構と考えるより、自然営力によって形成されたものと考えて良いであろう。

2. I地区

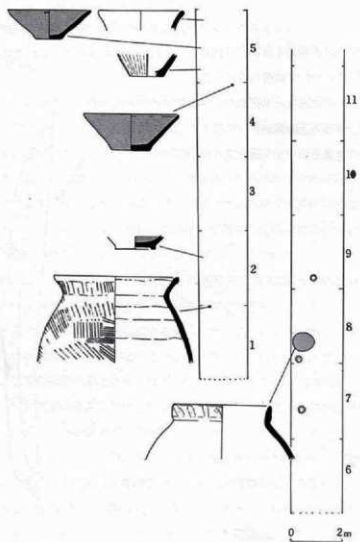
数ヶ所のグリットよりややまとまって遺物の出土をみたが、明確な遺構は検出されなかった。当地区の第Ⅲ層黄褐色土層は1区から3区にかけて傾斜していき、4・5区では表土より約1mに達する。6区以降については明らかにできなかったが、谷状地形を示している。また、8区においては第Ⅱ層中より礫とともに同一個体の土師器破片（写真4）が出土しているが、これらは遺構というより流れ込みの典型例のように思われる。



第11図 A-12グリット集石 (1:40)



第12図 竪穴遺構・土城 (1:40)



第13图 I地区全体图



◀写真4

I地区B区遺物出土状況

写真5▶
H地区 壘穴遺構



写真6 H地区遺構



写真7 H地区縄文前期土器出土状況



写真8 H地区砥石出土状況



写真9 | 地区4区 弥生時代鉢出土状況



写真10 | 地区1区 古墳時代壺出土状況

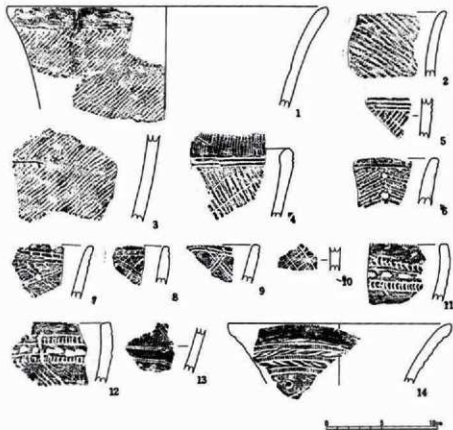
第2節 遺物

1. 縄文時代前期の土器

H地区第IV層中より出土したもので、いずれも諸磯様式に含まれるものである。破片数が少ないので個々の遺物について説明を加える（第14図・写真11）。

1～3は縄文のみの土器である。1と3は同一個体で、深鉢形で口縁がやや外反する器形をとる。口縁部から口唇部にかけて無文帯があり、口縁以下は単節斜縄文が施される。3は胴部で、原体の接合部分が表われており、十へて左傾の単節斜縄文が施されている。2は右傾の単節斜縄文で口唇部から全面に施されるようである。胎土は不良で、縄文原体は不明確である。

4・5は半截竹管による平行沈線文が施され、その間を半截竹管による斜行の沈線が施文され、それと交差するように沈線が数本施されている。4は口唇部から器内面にかけて櫛状工具による沈線が施される。



第14図 縄文時代前期の土器拓影図(1:3)

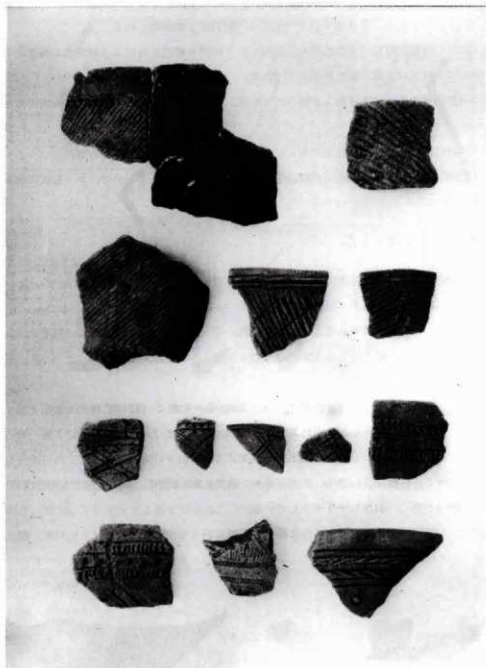


写真11 縄文時代前期の土器

6はいわゆる肋骨文である。口唇部に半截竹管による平行沈線文で区画し、垂下させた竹管文と椀形状に走る竹管文との交点に円形竹管文を配したものである。

7～10は半截竹管による平行沈線格子目文を施すものである。7・8は平行沈線文間を瓜形文が施されている。また、7は格子目文の交点に円形竹管文が押捺される。

11・12は口縁部に幅広の平行沈線を二条施し、その間を棒状工具により刺突文が施される。なお、胴部にかけては沈線が施されるようである。

13は有筋平行沈線による区画文が施されている。区画外は縄文が磨消され、区画内のみに残されている。

14は口縁部に三条の連続瓜形文を施し、その間に篋切文を加えたものである。

以上説明した土器はすべて縄文前期後半の諸磯様式に比定されるもので、a・b式に含まれるものであろう。

2. 弥生時代後期の土器

主にI地区4・5区より出土したものであるが、H地区からも細片が出土している。

壺形土器（第15図1・4）

1は小形壺の口縁部破片である。器表面には軽いミガキが加えられ、器内面は刺毛目調整が施されている。4は底部破片で、器表面にはミガキが加えられる。

鉢形土器（第15図2・3）

2は約 $\frac{1}{2}$ 残存。口縁部径13cm、底部径4cm、器高4.8cmを測る。ほぼ直線的な器形を呈する。器内表面とも丹念なミガキが加えられる。底部はケズリのままである。口縁下に2個一対の小孔が焼成前に穿たれている。なお、底部まで赤色塗彩されており、本例は蓋としての可能性もある。3は完形である。口縁部径14.8cm、底部径6cm、器高5.8cmを測る。器内表面とも赤色塗彩が施されるが、焼成が悪く、剥落しザラザラしている。

なお、この他櫛描波状文の施文された壺形土器細片が三点出土している。



写真12 弥生時代後期の鉢

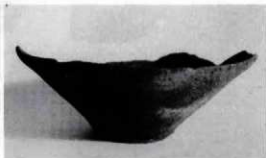
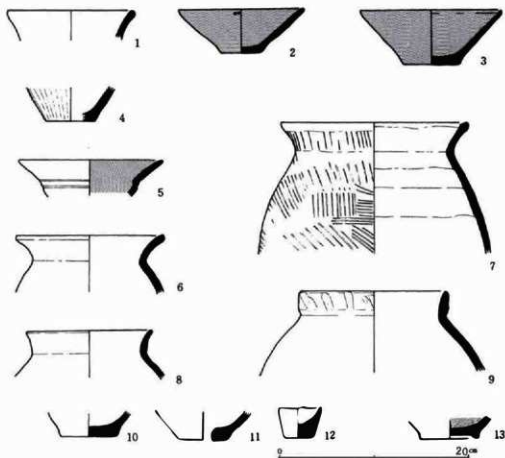


写真13 弥生時代後期の鉢



第15図 弥生～平安時代の土器（1：4）

3. 古墳時代の土器

H・1地区より万遍なく出土したが、実測可能な土器は少ない。図示した遺物は、坏形土器1、甕形土器5、甕1、ミニチュア土器1である。

坏形土器（第15図5）

口縁部破片である。体部中位に陵をもち、口縁は外反する。器内表面ともに丁寧な研磨が施され、内面は黒色処理が施される。

甕形土器（第15図6・7・8・9・10）

6はくの字状に強く外反する器形をとる。器表面は丁寧に横ナデが施されている。7は胴部から口縁部約 $\frac{1}{4}$ を残す。器表面はタタキがなされ、内面は輪積み痕を明瞭に残す。胎土に小石、砂粒を含み焼成は悪い。8は頸部より緩く外反する小形甕である。9は口縁部が頸部よりほぼ直立して立ち上がっている。

口縁部表面は部分的に縦のヘラケズリが施されている。胎土は緻密で、焼成も良好である。



写真14 古墳時代の壺



写真15 古墳時代の壺

甕形土器 (第15図11)

底部付近全周を残す。底部に径1.2cmの孔が開けられている。

ミニチュア土器 (第15図12)

H地区B-11グリットのII層黒色土中より出土した完形の甕形土器である。

4. 平安時代の土器 (第15図13)

ただ1点のみ図示し得たにすぎないが、該期破片と思われるものはH地区からかなり出土している。13は高台付环形土器で、内面は黒色処理が施されている。

5. 石器・石製品

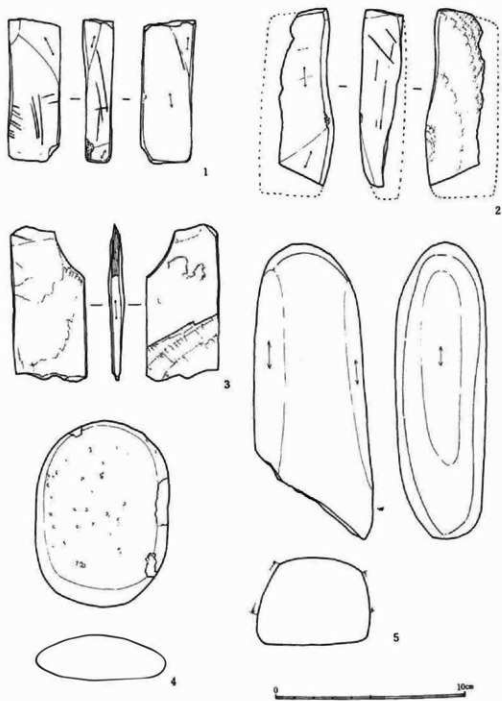
調査によって出土した石器類は、砥石3点、磨石2点のみであった。

砥石 (第16図1～3)

1. 現存長7.5cm、副2.5cm、厚さ1.4cmを測る。全面に1～3条の線条痕が認められる。2は破損が著しいが、形態的には1と同様長方形であろう。3は表側面ともに剝落破損したもので、側面の一部に磨面が残っている。以上3点は総てH地区、II層中より断片的に出土したものである。古墳時代鬼高期土器片が主体的であるので、該期所産と考えたい。

磨石 (第16図4・5)

4. 明確な磨面は認められないが、ほぼ全面が軽く磨かれている。5は長い棒状の石両側面を磨いている。H地区II層出土。



第16圖 石器実測圖(1:2)

引用・参考文献

- 飯山北高等学校地歴部 1966 「深沢遺跡概報」
- 飯山北高等学校地歴部OB会 1977 「遺跡分布調査報告Ⅰ」
- 飯山市教育委員会 1973 「飯山市田草川尻遺跡緊急発掘調査報告書」
- 飯山市教育委員会 1978 「田草川尻遺跡Ⅱ」
- 飯山市教育委員会 1984 「田草川尻遺跡Ⅲ」
- 太田文雄 1980 「北信濃弥生後期幅年について」 信濃32-4
- 大原正義 1982 「山ノ神遺跡」 長野県史考古資料編全一卷に
- 高橋 桂 1972 「魚形線刻画のある土器片」 信濃24-11
- 西沢隆治 1982 「深沢遺跡」 長野県史考古資料編全一卷に
- 松沢芳宏 1982 「有尾古墳群・勘介山古墳」 長野県史考古資料編全一卷に

昭和60年度 第4次田草川尻遺跡調査会名簿

顧問	小野沢 静 夫	(飯山市長)
会長	浦野 昌 夫	(飯山市教育長)
副会長	武田 作之助	(飯山市教育委員会教育次長)
委員	佐藤 政 男	(飯山市文化財専門委員長)
"	高橋 桂	(飯山市文化財専門委員—考古)
"	上原 幸 夫	(飯山市文化財専門委員—秋津地区)
"	坪井 剛	(秋津地区区長会長)
事務局	小川 恵 一	(飯山市教育委員会社会教育係長)
	望月 静 雄	(飯山市教育委員会社会教育係)

(調査団)

団長	高橋 桂
	松沢 芳 宏
	望月 静 雄
	松沢 伸 一

(作業協力者)

丸山そめ(山根) 猪瀬よし子(大久保) 上原幸夫(作業員責任者・大久保) 坪井園(大久保) 松沢一子(大久保) 坪井文字(大久保) 上原千代(大久保) 米沢キクエ(山根) 藤沢信子(中根) 松沢延子(大久保) 石沢ちよえ(飯位野) 竹内強志(奈良沢) 野口重行(神明町) 岸田文彦・栗岩康彦(市教育委員会事務局職員) 飯山市農業協同組合秋津給油所

飯山市埋蔵文化財調査報告 第13集

田草川尻遺跡Ⅳ

昭和61年2月28日印刷・発行

編集・発行者 飯山市教育委員会

印刷 榑足立印刷所
